

「知っている」の否定形* “Negative Form of Sit-teiru”

前 田 ひとみ

1. はじめに

「～ている」の形の否定形は普通、「～ていない」になる。しかし、「知っている」の否定形として「～知っていない」ではなく、「知らない」が頻繁に用いられる。例えば、「を知っていますか。」と聞かれた時、「*いいえ、知りません。」ではなく、「いいえ、知りません。」と答える。この現象はよく知られているが、なぜこのような現象が起きるのかについての研究は久野（1983）の論文の他には見当たらない。本論文では、久野（1983）の分析を再検討し、新しい言語学概念（「パーフェクト相」（工藤（1989、1995）、金水他（2000）など）と「Individual/Stage-level」（Carlson（1977a.b）、Kratzer（1989）、Diesing（1992）など）を用いて、再分析する。すなわち、「知っている」の否定形として「知らない」と「知っていない」が混在しているが、これを詳細に見ると、次のように整理できることがわかる。「知っている」の否定形が Individual-level predicate として解釈される場合は、必ず「知らない」となり、Stage-level predicate として解釈される場合で、[+パーフェクト] の場合は、必ず「知っていない」になる。また、Stage-level predicate で、[-パーフェクト] の場合は「知らない」と「知っていない」の両方が可能になる。

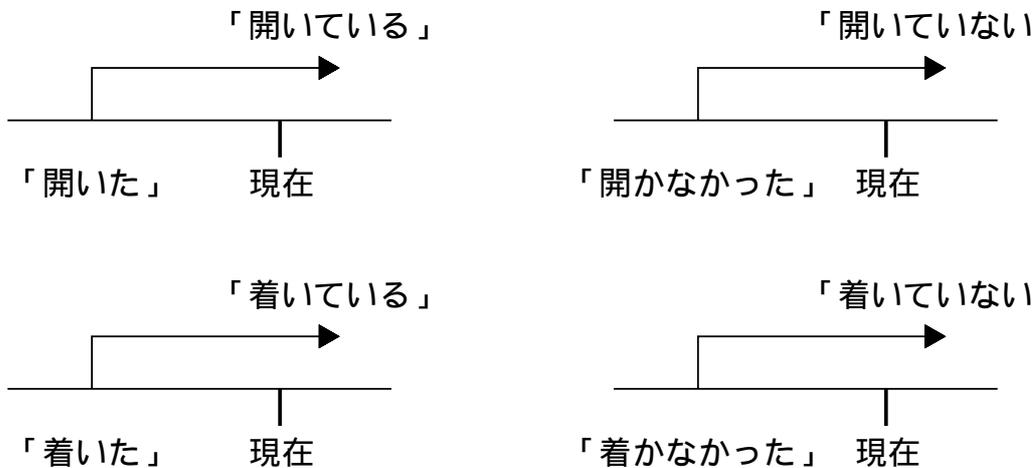
このように再分析することによって、久野（1983）の分析の妥当性と新しい言語学概念の有用性を示したい。

2. 「知らない」の本質

まず、「知っている」の否定形として用いられる「知らない」は、「知る」の否定形なのか、「知っている」の否定形「知っていない」が「知らない」という形に変化して用いられるのかを検証する。

金田一（1950）によると、動詞はそのアスペクト特性により、4つに分類される。「状態動詞」、「継続動詞」、「瞬間動詞」、「第4種の動詞」である。¹このうち、「状態動詞」しかそのままの形で現在の状態について述べることができない。その他の動詞は「～ている」をつけて現在の状態を表すことができる。「知る」は「瞬間動詞」に属するとされている。²「瞬間動詞」に「～ている」をつけると、ある時点でその event が起こり、現在もその結果が続いていること表せる。否定形の場合も同様である。（「開く」「着く」は瞬間動詞）

(1)



(2) a. 窓が開いた。

b. 窓が開いている。

(3) a. 窓が開かなかった。

b. 窓が開いていない。

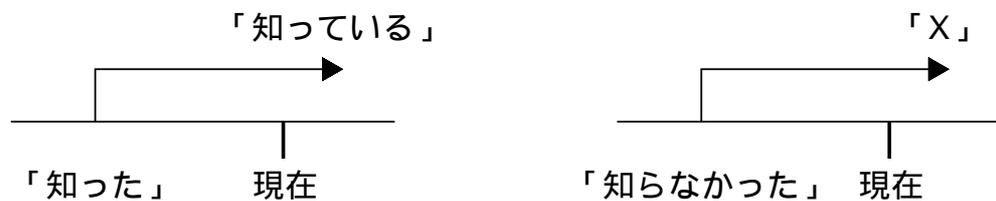
(4) a. 太郎が駅に着いた。

b. 太郎が駅に着いている。

- (5) a. 太郎が駅に着かなかった。
b. 太郎が駅に着いていない。

次に「知る」の場合をしてみる。

(6)



- (7) a. 太郎が花子の電話番号を知った。
b. 太郎が花子の電話番号を知っている。
(8) a. 太郎が花子の電話番号を知らなかった。
b. 太郎が花子の電話番号を知らない。

(8b) に示したように (6) の「X」で表した部分を表現するために「知らない」を用いる。他の瞬間動詞では、現在の状態を述べる時、「～る」形を使うことはできない。従って、(8b) の場合の「知らない」は明らかに「知ってない」の代用として用いられている。そこで、これ以降、本論文において、この場合の「知らない」を、アスペクト的側面を含んでいるという意味で、「知らない[Ⓐ]」と表記することにする。尚、本来の「知る」の否定形としての「知らない」は次の (9b) のような場合に用いられる。

- (9) a. 山田さんは明日、事件の真相を知るだろう。
b. 山田さんは明日になっても事件の真相を知らないだろう。

3. 久野（1983）の分析：構文的要因

「知っている」の否定形が常に「知らない[Ⓐ]」になるわけではない。「知っていない」が使われることもある。久野（1983）は、「知っている」の否定として「知っていない」が用いられる場合を構文的要因と意味的要因に分けて分析している。まず、構文的要因に関して検討したい。久野（1983）の挙げている構文的要因は二つある。（例文（10）（11）,（14）-（17）は久野（1983）による。）

構文的要因 [1] 「知っている」と並置され、肯定・否定の対照を表す場合。

(10) ドイツ語を 知っていても $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. 知らなくても} \\ \text{b. 知っていなくても} \end{array} \right\}$

採用試験には関係ない。

(11) ドイツ語を 知っていようが $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. 知らなかりうが} \\ \text{b. 知っていなかりうが} \end{array} \right\}$

採用試験には関係ない。

これに対しては疑問がある。同じように「知っている」と並置され、肯定・否定の対照を表す時でも「知っていない」が使いにくい例もある。³

(12) 太郎は知ってか $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. 知らないでか} \\ \text{b. ?? 知っていないでか} \end{array} \right\}$

いつも花子を傷つけるようなことを言う。

また、並置性で挙げられた例（10）は並置されてなくても、「知っていない」が可能である。

(13) 太郎はたとえドイツ語を $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. 知らなくても} \\ \text{b. 知っていなくても} \end{array} \right\}$

あの会社に採用されていただろう。

以上から、「知っていない」の形が可能になるのに並置性は関係ないことになる。

構文的要因 [2] 「知っている」の否定形に活用変化語尾がついた場合。⁴

(14) この試験に合格するためには、日本語をよく

$\left\{ \begin{array}{l} \text{a. * 知らなければ} \\ \text{b. 知っていなければ} \end{array} \right\}$ ならない。⁵

(15) 日本語を $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. 知らなくては} \\ \text{b. 知っていなくては} \end{array} \right\}$ 生活に困るだろう。

(16) 日本語を $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. 知らなくても} \\ \text{b. 知っていなくても} \end{array} \right\}$ 生活に困らないだろう。

(17) 誰かこの問題の答えを $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. 知らないだろうか。} \\ \text{b. 知っていないだろうか。} \end{array} \right.$

この要因も常に「知らない[Ⓐ]」ではなく、「知っていない」になる訳ではない。「知らない[Ⓐ]」でも、「知っていない」でもどちらも可能であるというだけのことである。語尾変化がついた場合に、「知っていない」になる場合が多いといっただけで、語尾変化がなくても、「知っていない」が使える例もある。

(19) 田中は、今の処、まだこの秘密を $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. 知らない。} \\ \text{b. 知っていない。} \end{array} \right.$ (久野(1983))

従って、語尾変化が「知らない[Ⓐ]」と「知っていない」の使い分けの決め手になるわけではない。

以上から考えて、「知っている」の否定として「知っていない」が使われる要因としては、構文的なものではなく、意味的な要因が重要になると考えられる。そこで、次の節で、意味的な要因が「知らない[Ⓐ]」と「知っていない」の使い分けにどのように影響を与えるかを詳細に検討する。

4. 意味的な要因再分析

久野(1983)は意味的な要因として[完了性][状態性][主観性]を挙げている。このそれぞれについて、新しい文法概念を導入して、検討したい。

4-1 意味的な要因 [1][完了性]

久野(1983)は、「知っていない」は完了性に着目した表現であり、「知らない」は、静的状態に着目した表現であると述べているが、この「完了性」を明確にするために工藤(1989)のパーフェクト相という概念を導入したい。

奥田(1978)によると、「～している」の基本的意味は継続(進行または結果持続)相である。これに加えて、工藤(1989)は、「～している」の形には「パーフェクト」の意味があるとしている。パーフェクトとは「ある設定された時点において、それよりも前に実現した運動がひきつづき関わり、効力を持っていること」(工藤(1989))である。すなわち、パーフェクト相には、発話時点、出来事時点以外に設定時点があり、設定時よりも出来事時が先行し、出来事の効力が設定時に及んでいるという特徴がある。

ここで、「知っている」の否定形が、結果持続相を表しているのか、パーフェクト相を表しているのかを知るために、この二つの相の違いについて工藤(1989)が述べている部分を引用したい。

(20) <パーフェクト> と <結果持続> は、

結果をもたらした先行した運動を直線ととらえているか否か
 運動の必然的な直線的な結果か、偶然的な間接的な結果か
 結果の持続 = 顕在性を前面にだしてとらえているか否か

工藤 (1989) は、 にあるように、「結果持続」は「結果をもたらした先行した運動を直線ととらえている」ので、「(スル)とき、(シタ)あと、(スル)まえ、(スル)あいだ、(スル)まで」を伴った従属節とは結びつくことができるが、「(スル)ときに、(シタ)あとで、(スル)まえに、(スル)あいだに、(スル)うちに、(スル)までに、～じかんで」を伴った従属節とは結びつくことができないとしている。((21a.) と (21b.) の文法性の違い) しかし、「パーフェクト」の場合は「(スル)ときに、(シタ)あとで、(スル)まえに、(スル)あいだに、(スル)うちに、(スル)までに、～じかんで」の従属節と結びつくことが可能である ((21c.))。

- (21) a. スイッチを切るまで、ずっと電気がついている。(結果持続)
 b. * スイッチを切るまでに、ずっと電気がついている。(結果持続)
 c. スイッチを切るまでに、電気が一度消えている。(パーフェクト)

従って、「(スル)ときに、(シタ)あとで、(スル)まえに、(スル)あいだに、(スル)うちに、(スル)までに、～じかんで」を伴った従属節に「～ている / ～ていた」が続いて、文法的であると判断された場合は、この「～ている / ～ていた」はパーフェクト相であると言える。この事実を使って、「知らないⒶ」と「知っていない」を組み合わせて、テストしてみる。

(22) 新聞を読むまでに、太郎は事件の真相を

- $$\left\{ \begin{array}{l} *a. \text{知らない} \textcircled{A}. \\ b. \text{知らない} \textcircled{B}. (\text{パーフェクト}) \end{array} \right.$$

この場合は、「知らない \textcircled{A} 」が使えない。従って、「知らない \textcircled{A} 」はパーフェクト相としては使えないのではないかと考えられる。

さらに、 \textcircled{B} に着目して、動作の結果が、必然的に残らないようなパーフェクト相の例を作る。

(23) 太郎は今まで一度も自分の限界を

- $$\left\{ \begin{array}{l} *a. \text{知らない} \textcircled{A}. \\ b. \text{知らない} \textcircled{B}. (\text{パーフェクト}) \end{array} \right.$$

この例でも、「知らない \textcircled{A} 」は使えない。

(22)(23)を見て分かるように、パーフェクト相の文では、「知らない \textcircled{A} 」は使えない。久野(1983)の「知らない \textcircled{B} 」が完了性に着目した表現であり、「知らない \textcircled{A} 」が状態性に着目した表現であるという記述は、「知らない \textcircled{A} 」は[- パーフェクト]、「知らない \textcircled{B} 」は[+ パーフェクト]であると言い換えることができるように思える。

しかし、そのような簡単に使い分けられるものではない。次の例の「知らない \textcircled{B} 」は[- パーフェクト]であるが、不適格ではない。(阿部泰明教授(南山大学): 個人談話 (24)の例文は阿部教授による。)

(24) 今、この理論を $\left\{ \begin{array}{l} a. \text{知らない} \textcircled{A} \text{でも、} \\ b. \text{知らない} \textcircled{B} \text{でも} \end{array} \right.$ 大丈夫です。

すなわち、「知らない①」は[-パーフェクト]だとは言えるが、「知っていない」は[+パーフェクト]であるとは言い切れない。このことから、[±パーフェクト]の区別だけでは、「知らない①」「知っていない」の使用分布を記述することはできないことがわかる。

4-2 意味的要因 [2] [恒常性]

久野(1983)はさらに、「知っていない」は、「非恒常性」の時のみ使われ、「知っていない」の場合は、「知っている」状態に突然移行しやすい感じがすると述べている。「恒常性」に関して、individual-level predicate と stage-level predicate の違いという観点から多くの研究がなされている。(Carlson (1977a.b.), Kratzer (1989), Diesing (1992) など)ここでは、Kratzer (1989) の individual-level predicate (以後、I-level predicate) と stage-level predicate (以後、S-level predicate) の統語的区別に基づいた判別のテストを紹介し、「知らない①」と「知っていない」の例をそのテストで I-level predicate なのか、S-level predicate なのかを検討する。

I-level property とは、個々の特性の集まりで、S-level property とは、個々の特性の一局面を表している。Kratzer (1989) は、この区別を意味的な解釈だけに頼らず、統語的に区別することを試みた。すなわち、S-level predicate は、extra argument (event or spatiotemporal) position を持つが、I-level predicate は extra argument position を持たないと想定し、それが妥当であることを実証した。さらに、S-level predicate の主語は VP Spec に基底生成し、I-level predicate の主語は IP Spec に基底生成するという区別も示した。⁶

Kratzer (1989) は、この S-level predicate と I-level predicate の統語的差異を利用したいいくつかのテストを示した。このうち、以下のテストは日本語にも応用可能であると思われるので、これを紹介し、「知らない①」と「知っていない」の分析に利用したい。when 構文に overt quantifier がない場合

や epistemic modal がない場合は、“always” が quantifier となり (Kratzer (1986))、when 節が restrictive clause、主節が“nuclear scope”(Heim(1982)) となる。動詞が、I-level predicate である場合、それは extra argument を持たないので、主語か目的語が indefinite NP でなければ、quantifier が variable を束縛することができない。従って、vacuous quantification となり、文は非文になってしまう。一方、S-level predicate は extra argument を持つ。主語や目的語が indefinite NP であるなしに関わらず、quantifier は extra argument の variable を束縛することができるので、非文とはならない。次のような文法性の違いが現れる。(Kratzer (1989) の例 “know” は I-level predicate、“speak” は S-level predicate である。注2 参照。)

- (25) a. *When Mary knows French, she knows it well.
 *Always [knows(Mary, French)][knows well(Mary, French)]
- b. When a Moroccan knows French, she knows it well.
 Always_x [Moroccan(x) & knows(x, French)][knows well(x, French)]
- c. When Mary knows a foreign language, she knows it well.
 Always_x [foreign language(x) & knows (Mary, x)][knows well(Mary, x)]
- d. When Mary speaks French, she speaks it well.
 Always_l [speaks (Mary, French, l)][speaks well(Mary, French, l)]
- e. *When Mary speaks French, she knows it well.
 *Always_{1 pt} [speaks (Mary, French, l)][knows well(Mary, French)]
- f. *When Mary knows French, she speaks it well.

*Always[knows (Mary, French)] [speaks well (Mary, French, I)]

(25) a-c では when 節も主節もその動詞は、I-level predicate である。しかし、(25) b は主語が、(25) c は目的語が indefinite NP であるので、quantifier がそれらの variable(x) を束縛することができる。しかし、(25) a の場合は、主語も目的語も indefinite NP ではないので、quantifier が束縛するものがなく、vacuous quantification となり、非文となる。(25) d は (25) a と同じように主語も目的語も indefinite NP ではない。しかし、(25) d が非文にならないのは、次のように説明できる。すなわち、(25) d の動詞は S-level predicate であり、extra argument を持つので、quantifier は extra argument の variable(l) を束縛することができるのである。従って、vacuous quantification とはならない。(25) e では、主節の動詞が、(25) f では、when 節の動詞が I-level predicate であるので、非文となる。

日本語でも、I-level predicate と S-level predicate では差が出る。

- (26) a. * 太郎がかしこい時、彼はとてもかしこい。(I-level)
 b. 太郎が図書館にいる時、いつも勉強している。(S-level)

ここで、「時」は「～時はいつも」の意味に解釈しなければならない。「～場合には」という解釈をしてはならない。英語の場合も、when 節ではなく、if 節にすると、文脈を variable として束縛することが可能となるので、I-level predicate の例でも、非文ではなくなる。従って、日本語の場合も、そのようなことがないような解釈をしなければならない。

「知らないⒶ」と「知っていない」の例をみる前に「～ている」の形が、I-level predicate として用いられることがあるのかどうかを検証したい。前にも述べたとおり、「瞬間動詞」+「～ている」の基本的な意味は「結果持続」

である。ある瞬間に起こった動作・出来事の結果が持続していることを表している。すなわち、出来事が必ず関与するのである。従って、S-level predicate であると考えるのが妥当である。しかし、否定形の場合、その動作・出来事が起こっていないことを表しているので、概念的には、この動作・出来事が起こらないという event に着目すれば、S-level predicate となり、この event の存在を考慮しなければ、I-level predicate になる。

そこで、「知らない[Ⓐ]」と「知っていない」の例を Kratzer (1989) のテストで検証する。

- (27) a. * 太郎が花子の電話番号を知らない[Ⓐ]時、彼はそれを全然知らない。⁷
 b. * 太郎が花子の電話番号を知っていない時、彼はそれを全然知っていない。
 c. 太郎が事件の真相を何も知らない[Ⓐ]時、彼はそれを知りたがる。
 d. 太郎が事件の真相を何も知っていない時、彼はそれを知りたがる。

(27a.b.) と (27c.d.) の解釈の差は微妙であるが、区別できる。(27a.b.) は正しく解釈できない。(27c.d.) では「知らない[Ⓐ]/知っていない」から「知っている」への変化が一回限りのものでなく、繰り返される可能性がある。すなわち、「知らない[Ⓐ]/知っていない」が「事件の真相を知る」という出来事が起こっていないことが重要ではなく、このような状態(「事件の真相を知らない[Ⓐ]/知っていない」状態)にあるかないかに着目している。この場合には解釈が可能である。これは「知らない[Ⓐ]/知っていない」が S-level predicate であると解釈されるからであろう。この場合は、「知らない[Ⓐ]」も、「知っていない」も可能である。(27a.b.) と (27c.d.) の差を認めることが可能であるとすると、(27a.b.) の従属節の「知らない[Ⓐ]/知っていない」は I-level

predicate で、(27c.d.) の従属節の「知らない[Ⓐ] / 知っていない」は S-level predicate であると言える。

次にこのテストで使った従属節の部分だけを取り出してみる。

- (28) 太郎が花子の電話番号を { a. 知らない[Ⓐ].
b. * 知っていない.
- (29) 太郎が事件の真相を何も { a. 知らない[Ⓐ].
b. 知っていない.

(28) の例では、「知っていない」が使えない。つまり、「知っている」の否定形が I-level predicate と解釈される場合は、常に「知らない[Ⓐ]」にならなければならないことがわかる。また、(29) で、「知らない[Ⓐ]」でも「知っていない」でも可能であることから、「知っている」の否定形が S-level predicate と解釈される場合は、「知らない[Ⓐ]」でも「知っていない」でも使えることもわかる。

4-3 意味的要因 [3][主観性]

久野 (1983) は、「知らない」は、知識の欠如を、その主体 (主語) の内側から見て記述した表現であり、「知っていない」は、知識の欠如を、外側から客観的に観察して記述した表現であると述べている。客観性に関しては、Abe (2001) の Direct Perception Constraint (DPC) の研究がある。DPC は次のように定義される。

(30) Direct Perception Constraint (DPC)

In neutral constructions (i.e. constructions without any topic), the speaker must be directly observing the event described by the sentence meaning.

Abe (2001)によると、日本語の場合、DPCがかかるのは、S-levelの文で existential の読みをする場合だけである。例えば、次の S-level の文は(31b.c.) の二通りの読みができる。(31a)の true generic の読みは英語の S-level の文では可能だが、日本語ではこの解釈はない。(31)のうち、DPCの制約を受けるのは、(31c.)のみである。

(31) 大学生が図書館にいる。

a. True Generic(??)

Graduate student[+F] are such that they are generally in the library.

Gen(x: graduate students (x),t)[x is in the library at t]

b. Generic Tense

It is generally true that there are some graduate students in the library.

Gen(t)[Some(x: graduate student(x))[x is in the library at t]

c. Existential

There are graduate students in the library (now).

Some(x: graduate students (x))[x is in the library at now]

DPCを「話し手が直接 event を観察し叙述する」つまり、「客観的に外側から観察しなければならない」という制約だと考え、久野(1983)の記述を見直すと、「知らない[Ⓐ]」は主観的表現であるということから、DPCがかからないと言える。(32)は、「知らない[Ⓐ] / 知っていない」が S-level predicate で、existential の解釈のみが可能になるような例である。

(32) 太郎が今のところ GB 理論を $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. 知らない}\textcircled{A}。 \\ \text{b. 知らない}。 \end{array} \right.$

(32) の文の主語を一人称にすると、(33) のように文法性が変わってくる。この場合、「知らない」が使えないのは、「知らない」に DPC がかかっていると言えるのではないだろうか。

(33) 私が今のところ GB 理論を $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. 知らない}\textcircled{A}。 \\ \text{b. *知らない}。 \end{array} \right.$

主語が一人称の場合は、客観的観察ができない。従って、S-level の文で、existential の解釈をしなければならない場合は、DPC の制約を受けて非文となる。Abe (2001) の枠組みで、「知らない \textcircled{A} 」の場合は、DPC がかからないことは説明できないが、今後の研究の方向として、「知らない \textcircled{A} 」と「知らない」の使用分布の説明に DPC を適応できるような形で見直すことも考えられる。また、Abe (2001) では、「DPC が働くのは、neutral な構文 (topic がない場合など)」と述べられているが、上に挙げた、(32)(33) の文法性は topic sentence にしても文法性は変わらない。このことも今の理論では説明できない。

さらに、S-level の文でも、4-1 で挙げた、パーフェクト相の例 ((23)) の主語を一人称にしても、「知らない \textcircled{A} 」ではなく、「知らない」が使われるので、この場合には、DPC は関係ないと思われる。

(34) 私は今まで一度も自分の限界を $\left\{ \begin{array}{l} \text{*a. 知らない。 (パーフェクト)} \\ \text{b. 知らない}。 \end{array} \right.$

DPC との関係があるのは、S-level predicate で [+パーフェクト] の場合だけであるようだ。

以上のように、DPC との関係に関しては、まだ不明な点が多い。さらなる研究が必要であると思うので、今後の課題としたい。

5. まとめ

これまでの観察をまとめると次のようになる。「知っている」の否定形は I-level predicate として用いられる場合と S-level predicate として用いられる場合がある。さらに、S-level predicate の場合には、継続相の用法 ([-パーフェクト]) とパーフェクト相 ([+パーフェクト]) の用法がある。このそれぞれの場合に「知らない[Ⓐ]」と「知っていない」が使い分けられる。

(35)

	I-level predicate	S-level predicate
[-パーフェクト]	「知らない [Ⓐ] 」	「知らない [Ⓐ] 」 or 「知っていない」
[+パーフェクト]		「知っていない」

I-level predicate で、[-パーフェクト] の場合は「知らない[Ⓐ]」が使われる。S-level predicate で、[-パーフェクト] の場合は「知らない[Ⓐ]」か「知っていない」が使われる。この場合、さらに、DPC のような客観性に関する制約で、「知らない[Ⓐ]」と「知っていない」の使い分けを規定することができる可能性がある。

I-level predicate で、[+パーフェクト] であることはない。[+パーフェクト] というのは、「出来事 (event) の効力が設定時に及んでいる」ことなので、event argument を含まない I-level predicate とは共起しない。

S-level predicate で、[+パーフェクト] の場合は「知らない」が使われる。

本論で挙げた、それぞれの代表的な例を再録しておく。

- (36) (= (28)) 太郎が花子の電話番号を $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. 知らない} \textcircled{A}。 \\ \text{b. *知っている}。 \end{array} \right.$
- (= (24)) 今、この理論を $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. 知らなくても、} \\ \text{b. 知らないなくても} \end{array} \right\}$ 大丈夫です。
- (= (32)) 太郎が今のところ GB 理論を $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. 知らない} \textcircled{A}。 \\ \text{b. 知らない}。 \end{array} \right.$
- (= (22)) 新聞を読むまでに、太郎は事件の真相を $\left\{ \begin{array}{l} \text{*a. 知らない} \textcircled{A}。 \\ \text{b. 知らない}。 \end{array} \right.$
- (= (23)) 太郎は今まで一度も自分の限界を $\left\{ \begin{array}{l} \text{*a. 知らない} \textcircled{A}。 \\ \text{b. 知らない}。 \end{array} \right.$

6. おわりに

本論文では、「知っている」の否定形として「知らない」が頻繁に用いられる現象を分析した。久野(1983)の分析を再検討し、新しい言語学概念(「パーフェクト相」(工藤(1989、1995)、金水他(2000)など)と「Individual/Stage-level」(Carlson(1977a.b)、Kratzer(1989)、Diesing(1992)など)を用いて、再分析した。すなわち、「知っている」の否定形として「知らない \textcircled{A} 」と「知らない」が混在しているが、「知っている」の否定形が Individual-level predicate として解釈されるか、Stage-level predicate として解釈されるか、あるいは[+パーフェクト] として用いられるか、[-パーフェクト] と

して用いられるかによって、使い分けられていることを示した。

これによって、久野（1983）の記述の妥当性と新しい言語学概念の有用性を示した。さらに、その他の新しい言語学概念（DPC）についても検証したが、今の段階で正確に記述することはできなかった。今後の課題としたい。

* 研究の初期の段階で方向性を示してくださった金城学院大学の藤原雅憲先生、細部にわたる質問に対して何度も e メールで丁寧に答えてくださった Harvard 大学の久野 暲先生、さらに、解決法がわからず、暗礁に乗り上げそうになったとき、適切な助言をしてくださった南山大学の阿部泰明先生に、心より感謝の意を表したい。本稿をまとめることができたのも、この三人の先生方のお陰だと思っている。それでも、本稿に誤謬がある場合は、当然ながら筆者の責任によるものである。

<注>

¹ 金田一（1950）以降、様々な研究（奥田（1978）、工藤（1995）など）によって、これらの分類や名称が修正されているが、ここでは、分類や名称の細部に立ち入る必要がないので、金田一（1950）の名称を使用する。

² 「知る」は瞬間動詞だが、英語の“know”は状態動詞である。Vendler（1967）も“know”をstate（状態動詞）と分類している。

³ (12)は並置性に問題があるかもしれない。下の例と同じで直接的な並置ではない。すなわち、次の例のように、「そうするのか」や「学生」が間に挿入されるからである。（久野 暲教授（Harvard 大学）：個人談話例文は久野教授による）

(i) 太郎は、知っていてそうするのか $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. 知らないでそうするのか、} \\ \text{b. ?? 知っていないでか、} \end{array} \right\}$

いつも花子を傷つけるようなことを言う。

(ii) そのクラスは日本語を知っている学生と

$$\left. \begin{array}{l} \text{a. 知らない} \\ \text{b. * 知っていない} \end{array} \right\} \text{学生の2クラスに分けられた。}$$

しかし、(13)に示したように、並置されてなくても、「知っていない」が使える場合もあるので、並置性は「知っていない」を使用する場合の必須条件とは言いがたい。

- ⁴ 久野(1983)では、変化語尾がつく例が挙げられているが、実際に使用されている例を見てみると助詞「と」がついて、「知っていないと」として使われている例も多い。
- ⁵ 久野(1983)は、この種の例文に対して、「知らなければ」は「(これから)理解できるようになる」の意味の動作動詞と解釈すれば、文法的であるかもしれないが、意図されている意味、即ち現在の状態を表す形式としては不適格である。代わりに、「知っていなければ」を用いなければならない。」と述べているが、筆者にはこの判断は正しくないと思われる。すなわち、この場合も「知らなければ」で、現在の状態を表すことができると判断する。
- ⁶ Diesing(1992)は S-level predicate の主語は -assignment と case の付与の関係で、raising verb と同様、必ず、IP Spec に移動すると Kratzer(1989)の派生を修正しているが、本論文では、この差は重要でないので、詳しく言及しない。
- ⁷ この例を、「太郎が花子の電話番号を知らない時、彼はそれを知りたがる。」にすると、文法的であると思うかもしれないが、これは、「太郎が花子の電話番号を知らない場合は、...。」で解釈しているからである。そもそも、「太郎が花子の電話番号を知らない時」が何度もあるわけではないので、この例の前件を「～時はいつも」と解釈する時、後件に何が来ようと、この文は非文となる。それは、英語の例で、(25a.)だけでなく、(25f.)も非文

であることと同様である。

<参考文献>

- 奥田 靖雄 (1978) 「アスペクトの研究をめぐって(上)(下)」教育国語 53, 54号
 金水敏・工藤真由美・沼田善子 (2000) 『時・否定と取り立て』
 日本語の文法 2, 岩波書店
- 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」言語研究 15号『日本動詞のアスペクト』
 (金田一春彦編) むぎ書房, 1976
- 工藤真由美 (1989) 「現代日本語のパーフェクトをめぐって」ことばの科学 3
 ————— (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト——現代日本語の時
 間の表現』 ひつじ書房
- 久野 暲 (1983) 『新日本語文法研究』 大修館書店
- Abe, Y. (2001) “Direct Perception Constraint” , in *Linguistics and
 Interdisciplinary Research*, Center of Excellence in Linguistics,
 Kanda University of International Studies.
- Calson, G (1997a) “A Unified Analysis of the English Bare Plural” . in
Linguistics and Philosophy 1.
- (1997b) *References to Kinds in English*. Ph.D. dissertation,
 University of Massachusetts, Amherst.
- Diesing, M. (1992) *Indefinites* , MIT Press.
- Heim, I. (1982) *The Semantics of Definite and Indefinite Noun Phrases*,
 Ph.D. dissertation, University of Massachusetts, Amherst.
- Kratzer, A (1986) “Conditionals” , in A.M. Farley, P. Farley, & K.E.
 McCullough(eds.) *Papers from the Parasession on Pragmatics and
 Grammatical Theory*, Chicago linguistic Society, 1-15.
- (1989) “Stage-level and Individual-level predicates” , in *Papers
 on Quantification*, University of Massachusetts, Amherst.
- Vendler, Z. (1967) *Linguistics in Philosophy*. Ithaca, N.Y., Cornell
 University Press. Reprint of 1957. Verbs and Times, *Philosophical
 Review* 66.